

中島三千男先生から学んだ地域調査の理念

田上 繁

中島三千男先生との最初の出会いは、1981年ごろ、日本経済史共同研究室へ新任教員として挨拶にやってこられたときであったと記憶する。当時、日本経済史共同研究室は、9号館の5階に設置されており、丹羽邦男教授、長倉保教授、山口徹教授の指導の下に、近世史、近代史を専攻とする院生十数人が研究に勤しんでいた。

中島先生は、就任後直ちに日本経済史の共同研究室に出入りし、合同で行われる研究会にも積極的に参加されるようになった。いつしか、面倒見のよい兄貴分的な立場となり、院生の研究の行き詰まりや生活上の悩みごとなどについて親身になって相談に乗ってくれた。とくに、先生と私の距離が縮まったのは、先生が1978年から関わっていた『大山崎町史』の編纂事業を基礎にして、1985年から1987年にかけて行われた、丹羽邦男先生を研究代表とする文部科学省科学研究費補助金「明治政府の社寺支配過程の総合的研究」の調査にメンバーの一員として加えていただいたときからである。

この大山崎地域の研究活動は、日本常民文化研究所（以下、常民研）が1982年に神奈川大学に招致されたのち、1995年から本研究所のプロジェクトとして位置づけられたことによりさらに大きく前進した。中島先

生を代表とする「大山崎歴史調査研究会」として発足したこのプロジェクトは、1998年から4年間の文部科学省の補助金を得て推進するに及んで、前回の「明治政府の社寺支配過程の総合的研究」が時代的に近世中期から明治維新期までであったのに対し、対象時期の始まりを中世から近世初期まで広げることができた。また、「山城国大山崎荘の総合的研究」という研究課題からも窺われるように、前回は専門分野が経済史中心であったのが、政治史、宗教史、建築史、さらには、民俗学などの分野も加える学際的な研究となった。このように、本研究は、これまで行われてきた中世の油神人の存在形態や、彼らを中心として成立した「自治都市」の研究から一歩進んで、大山崎地域を対象としながら、(1) 中世から近・現代までを通して分析する、(2) 政治史、経済史、宗教史、建築史など諸学が協働して進める多面的な研究を行う、(3) 歴史学のみならず、民俗学の成果を積極的に取り入れた考察を行うなど、総合かつ学術的な調査・研究を目指すものであった。そして、大山崎地域の個別研究にとどまらず、地域史研究、とりわけ、都市論(都市空間・都市景観論)を媒介にしながら、深化しつつあった寺社領の研究に寄与することを目的としたのである(「山城国大山崎荘の総合的研究」の「まえがき」、2002年3月)。この大山崎地域の共同研究を進める過程で、地域の調査、研究に関する手法や理念といったものが一気に構築されていく。その特徴を3つ挙げるとすれば、次のようになるであろう。

1. 悉皆調査の導入

「大山崎地域研究を日本常民文化研究所の一プロジェクトとして位置づけるにあたり、私たちは一つの決断を

いたしました。」(『正田家文書目録(2分冊の2)』の「序」、2005年3月)と述べるように、大山崎地域調査では、膨大な史料群の中から研究課題に関係のある史料だけを選択して、それを素材に分析していた従来の「抜き取り」方式を改め、当該地域に伝わる所蔵史料のすべてを調査、収集、目録化するといった形態を導入した。そして、その「悉皆調査」の成果を広く一般に公開するとともに、「私たちだけでなく多くの研究者がこの地域の研究に関わる事によって、初めて、この地域の総合的な研究が可能となる」と、「悉皆調査」を通して他の研究者へ史料を提供することや、地域の研究者と連絡することの重要性を説いたのである。さらに、「悉皆調査」を行うことにより、大山崎地域に残る膨大な中世から近・現代にかけての史料群が、所蔵者によって確実に伝世される条件が整うと考えられた。この「悉皆調査」方式は、当時、常民研の共同研究プロジェクトとして同時に進められていた「奥能登時国家の総合的研究」(代表網野善彦氏)とともに、その後の常民研の調査方法として確立し定着していくことになる。

2. 地域との関係の重視

中島先生が地域の研究者との関係を重視したことは上記の通りである。一例を挙げると、大山崎歴史資料館との提携に力を注ぎ、同館の学芸員福島克彦氏には共同研究の一員として研究の一端を担っていただいていた。こうした資料保存機関や地域の研究者とのつながりとともに、史料所蔵者とも良好な関係を築くことに人一倍尽力された。大山崎地域には、大山崎離宮八幡宮、観音寺、社家の系譜を引く正田家をはじめ、青木家、岩井家など、

大量の史料を所蔵する社寺や家がいくつか存在する。1万点を超える中世以来の貴重な史料を所蔵している大山崎離宮八幡宮の調査では、宮司の津田定明氏から、「中島先生には全幅の信頼を寄せているので、好きなように所蔵文書の調査を行ってください。むしろ、調査してくれることを有り難く思っています。」と、調査の度ごとに暖かい言葉をかけてくださっている。また、岩井貞之氏からは、同家所蔵文書目録の刊行に際して、「先生方のお力で、長年死蔵し反古となる運命にありました文書類に命が吹き込まれ、大山崎の歴史の片隅にささやかな居場所を与えていただきました。……お暑い中、熱心に調査し記録して、このような文書目録にお纏め下さいましたことは、我が家にとりまして奇跡のような出来事でした。神奈川大学の先生方との出会いとご尽力に、改めて心から感謝し、この文書目録を我が家の家宝として、末永く大切に伝えてまいりたいと存じます。」との丁寧なお手紙をいただいている。また、疋田家では、ご当主種信氏の足跡をまとめるにあたり、先生は監修者として『疋田種信半生記―疋田家の近現代史―』の刊行に深く関与された。これらの事例から、先生が地域の研究者や史料所蔵者との関係を如何に大切にしていたか窺い知ることができよう。

3. 研究メンバーによる論文作成の優先

「論文を書くのではない。学界に資料を提供するのである。」という常民研の創始者渋沢敬三氏が論したように、中島先生の調査・研究のあり方は、その教えを忠実に実践しているかのように思われる。収集した史料はすべて写真版に製本するとともに、目録化の終えたものについては、全国の研究者が利用できるよう随時公開している。

上述した所蔵者の史料については概ね目録が完成し、京田辺市の『松井幸信家文書目録』のように、大山崎地域以外の関連文書についても調査を行って目録を作成し刊行した。未完成の目録は離宮八幡宮文書を残すのみであり、現在、定年退職された先生が中心となつて急ピッチで目録の作成に取り組んでいる。

また、研究成果については、その都度、共同研究のメンバーがそれぞれ論文をまとめて発表してきたが、先生は常にメンバーに研究成果を上げさせることを第一義的に考えていたように思われる。そのお陰で、私もその後の研究のベースとなる論文をいくつか書き上げることができた。本当に感謝以外の何ものもない。この気持ちは、研究メンバーの大方が感じるところであらう。

このように、中島先生から受けたご恩は計り知れないものがあり、今後、その万分の一でもお返しできればと思っている。先生ご自身の口からよく「これから大山崎地域の本格的な研究に入る。」といわれるように、先生のさらなる飛躍は、定年退職後の正にその日から始まるのかも知れない。